

# 「～がする」構文と「～にする」構文に関する覚え書

登田 龍彦

## A Note on the *Ga Suru* and *Ni Suru* Constructions

Tatsuhiko TODA

(Received September 2, 2002)

### 1. はじめに

本稿の目的は, (1) の There 構文に対する日本語訳に現れる「～がする」構文について考察することである。

(1) There is the smell of gas. (ガスのにおいがする.) (『新英和活用大辞典』)  
一般的に, パーソナルコンピュータやネコのような単純な普通の事物の存在は「～がある/いる」構文によって表現されるのに対して, においや足音などの存在や生起は「～がする」構文によって表現される。例えば, 以下の例を見てみよう。

- (2) a. テーブルの上にパソコンが {ある/\*いる/\*する}.
- b. テーブルの下にネコが {\*ある/いる/\*する}.
- c. ガスのにおいが {\*ある/\*いる/する}.
- d. 階段で足音が {\*ある/\*いる/する}.

「ある」と「いる」の用法の決定は, 主語の指示物が生物対無生物であるかどうかという要因でなく, 指示物が静的に捉えられるか動的に捉えられるかといった認識的要因に依るように思われる (登田 (1993) 参照)。

- (3) a. 台風8号が鹿児島島の南の海上に {いる/ある}.
- b. ひかり43号が18番ホームに {いる/\*ある}.
- c. ひかり43号が修理工場に {\*いる/ある}.
- d. 今日私が {\*いる/ある} のはあの先生のお陰である.
- e. 彼は, ベッドの上で昏睡状態で寝たままで {??いる/ある}.

台風8号は無生物であるが, 動的に捉えられる気象現象であるため「いる」とも共起する。ひかり43号の場合も同様に, その走行可能性が含意される場合は「いる」と, 含意されない場合には「ある」と共起する。また, 「私」が, ある人間的付加価値を具えた一人前の存在として捉えられる場合には, 「ある」と共起する。因に, ここでは「私」は「今日の私」とパラフレーズできる。この場合の「私」は静的なものとして捉えられているが, (3e) の用法の場合も同様に説明することができる。一方, 足音というようなものの存在というより現象の生起を表現する場合には, 「ある/いる」ではなく「する」が使用される。本稿では, 五感知覚の対象を表現する名詞に焦点を当て, 「～がある」構文と「～がする」構文の分布上の棲み分けについて議論する<sup>1)</sup>。議論の構成は次の通りである。まず, 2節で「～がある」構文と「～がする」構文の用法の違いについて影山 (1993) の分析を取り上げ, その妥当性を吟味し, 両構文に「におい」が生起する

ことを指摘する。3節で、知覚表現の分布について議論する。4節で「～にする」構文について考察する。最後に、議論のまとめを行う。

## 2. 「～がある」構文と「～がする」構文

影山 (1993) は、(4) のような「～がする」構文の例に見られる名詞は複雑事象名詞 (すなわち動名詞) で、(5) に示すような2種類の複雑事象名詞がこの構文に典型的に生起すると述べている。

(4) 急に胸騒ぎがした。

- (5) a. 自然現象：雨漏り，地鳴り，海鳴り，地響き，底冷え，稲妻，物音，(雷の) 遠鳴り，しろうとうけ，見劣り，目移り，水漏れ，見栄え  
 b. 生理現象：予感，胸騒ぎ，息切れ，耳鳴り，胸焼け，気疲れ，気乗り，めまい，吐き気，頭痛，心変わり

影山は、この構文の「する」は形式動詞で文全体の意味解釈と格関係は複雑事象名詞に由来すると考え、(5) の複雑事象名詞 (影山に従い VN と略す) は固有のガ格を取る非対格であると主張している。

- (6) a. 非対格 VN-----和語＝固有ガ格 (cf. 漢語＝格なし)  
 b. 他動詞 VN, 非能格 VN-----構造格ヲ格

本節では、影山の主張に基づいて、(4)-(5) の複雑事象名詞が生起する「～がする」構文と「～がある／いる」構文を比較し、その後で影山の分析の妥当性を吟味する。影山が「～がする」構文と「～がある」構文の違いとして挙げているのは、前者には複雑事象名詞が生起するのに対して、後者には純粋な名詞や単純事象名詞が生起するというものである。(7) の例から分かるように、複雑事象名詞は「～がある」構文には生起できず、単純事象名詞は「～がする」構文には生起できない。

- (7) a. {底冷え／物音／胸騒ぎ／息切れ／気疲れ／気乗り／めまい／心変わり／見栄え} が {\* ある／する}。(複雑事象名詞)  
 b. {あしたテスト／入学試験／面接／来客} が {ある／\* する}。(単純事象名詞)

また、影山は「～がする」構文に生起する複雑事象名詞は単純事象名詞と違い、「～の最中に」という構文には生起しないと述べている。

- (8) a. {\* めまい／\* 胸騒ぎ／\* 地鳴り／\* 胸焼け} の最中に (複雑事象名詞)  
 b. {理科の授業／入学試験／運動会／結婚式} の最中に (単純事象名詞)  
 c. {\* 言語学を講義／\* 結果を報告／\* 運動会を開催} の最中に (複雑事象名詞)

(8a) に見られる問題の名詞は (8c) に見られる普通の複雑事象名詞と同様に「～の最中に」構文に生起しない。従って、影山は「～がする」構文と生起する名詞は複雑事象名詞で、「～がある」構文に生起する名詞は単純事象名詞と純粋な名詞であると主張する。

更に、影山は、「～がする」構文に生起する名詞が複雑事象名詞であることを示す積極的な証拠として、数詞「たくさんの」は本来名詞である単純事象名詞を修飾するのに対して、複雑事象名詞は本来述語であるので数詞を伴うことができないという事実を挙げている。

- (9) a. たくさんの {いたずら電話／出血／テスト／事故} があった。(単純事象名詞)  
 b. \* たくさんの {雨漏り／地鳴り／胸騒ぎ／心変わり} がした。(複雑事象名詞)

以上、影山の主張から明らかなように、問題の両構文の用法には明確な棲み分けが見られる。が、少し観察してみると、「におい」という嗅覚の知覚的名詞が両構文に生起することがわかる((10)-(11)は『新英和活用大辞典』から引用)。

- (10)a. ガスのにおいがする。(There is the smell of gas.)  
 b. 彼女の居間はかすかにアルコールのにおいがした。(Her living room smelled faintly of alcohol.)  
 (11)a. この部屋にはビールだとはっきりわかるにおいがある。(There's a distinct smell of beer in this room.)  
 b. どの香水も特有のにおいがある。(Every perfume has its own distinctive smell.)

確かに、「におい」は問題の両構文に生起するが、他の複雑事象名詞と同様「～の最中に」や「たぐさんの～」の表現とも共起しない。

- (12)a. \*においの最中に  
 b. \*たぐさんのにおい

影山のテスト結果に従えば、「におい」は複雑事象名詞と単純事象名詞(あるいは純粋な名詞)の両方の特性を持つ曖昧な名詞であることを示唆している。次節では、「におい」以外の知覚的名詞についても考察する。

### 3. 知覚的名詞考

問題の両構文に表れる知覚的名詞「におい」の振舞いは他の知覚的名詞と比べた場合特殊なものであろうか。まず、小泉(1989b)が挙げている知覚動詞に関する基本的な事実を見てみよう。

- |        |     |     |      |       |
|--------|-----|-----|------|-------|
| (13)a. | 視覚: | 見る  | 見える  | —     |
| b.     | 聴覚: | 聞く  | 聞こえる | 音がする  |
| c.     | 嗅覚: | 嗅ぐ  | 匂う   | 匂いがする |
| d.     | 味覚: | 味わう | —    | 味がする  |
| e.     | 触覚: | 触る  | 感ずる  | 感じがする |
|        |     | 他動詞 | 自動詞  | 複合表現  |

小泉が知覚複合表現と呼ぶ「知覚的名詞+がする」からなる表現が視覚を除くその他の知覚の場合にのみ見られるのが、日本語の知覚動詞の特徴と言われている<sup>2)</sup>。注意すべきことには、上記の知覚的名詞は「ある」と共起する<sup>3)</sup>。

- (14)a. 日本人には聞こえない音がある。  
 b. 畳には匂いがある。  
 c. 彼の文体には独特な味がある。  
 d. なにかを投げるときなどに、肩にひっかかる感じがある。

この事実観察から、知覚的名詞は、基本的に問題の「～がする」と「～がある」の両構文に生起するという特性を持ち、影山の複雑事象名詞とは区別されるべきものであるということが明かになった。

次に、問題の「～がある」構文と「～がする」構文の用法の違いを「におい」を例として考えてみよう。

- (15) a. エンジンからいつもと違う焦げ臭いにおいが {する / \*ある}.

b. 畳にはにおいが{|\*する/ある|}.

(15a) では、エンジンに一時的に焦げ臭いにおいが生じていることを表しているのに対して、(15b) では畳はにおいを永続的特性として持つことすなわち所有を表している<sup>4)</sup>。

また、「におい」に関して興味深いことに、目や耳などの知覚場所（以下「知覚場所名詞」と呼ぶ）を「に」格にして（受動的な）知覚を表現する「～にする」構文が嗅覚の場合には一般的には認められていないようである。『広辞苑（第五版）』には、当該項目の慣用句として「鼻にする」が挙げてない。また、味覚や触覚に関する知覚場所名詞も特定し難い。「口にする」「手にする」とは言うが、味覚や触覚の意味と異なり、「食べる」「持つ」などの意味になってしまう。

- (16)a. 目にする  
 b. 耳にする  
 c. \*鼻にする  
 d. 口にする  
 e. 手にする

このような例を影山（1993）は熟語と見なして何ら考察を行っていない。本稿では次節で少しその分布の謎について議論する。

#### 4. 「～にする」構文

小泉（1989b）は、問題の複合表現を（17）に示すような具格から主格への項化と呼ぶ過程によって派生させている。この小泉の分析を援用すれば、所格から与格への項化は（18）のように考えることができる。

- (17)a. 匂う==>匂いで・感ずる==>匂いが・する  
 b. 聞こえる==>音で・感ずる==>音が・する  
 (18)a. 目で・感ずる==>目に・する  
 b. 耳で・感ずる==>耳に・する  
 c. 鼻で・感ずる==>\*鼻に・する  
 d. 口で・感ずる==>口に・する  
 e. 手で・感ずる==>手に・する

ここで注意しなければならないことが3点ある。まず、小泉のいう「感ずる」が「する」と形を変えろという意味は、形態上の変化/派生を意図するものであって、「する」が「感ずる」という意味を持つというものではないと思われる点である。本稿は、「する」の意味は『広辞苑（第五版）』も述べているように、「起る（のが感ぜられる）」意を表すものとする立場を取る<sup>5)</sup>。更に、項化それ自体が起っているかどうかも問題になる。何故なら、「目/耳/鼻/口/手に・感ずる」という表現も成り立つように思えるからである。最後に、何故「\*鼻にする」とは言わないのであろうかという点である。本稿ではこの点的を絞って考察する。

問題の表現は、語の結合性の点からも慣用句であることは明白である。

- (19)a. 彼を目にした/\*目に彼をした  
 b. 彼の噂を耳にした/\*耳に彼の噂をした  
 (20)a. 隣の部屋で奇妙な音がした/奇妙な音が隣の部屋でした  
 b. 大学で彼の噂を耳にした/彼の噂を大学で耳にした/\*彼の噂を耳に大学でした

知覚場所名詞と「する」の結合度は知覚的名詞と「する」の結合度より強いと言える。なぜなら、知覚場所名詞と「する」の間に補部の目的語や付加詞の場所句（例えば「彼の噂」や「大学で」）を挿入することができないからである。問題は、「\*鼻にする」は偶然の空白（accidental gap）かそれとも体系的な空白（systematic gap）かということになる。もし、問題の空白が偶然の空白であれば、その偶然の不生起は何に依るものかを考察する必要がある。一方、それが体系的な空白であれば、その体系的な構図を明白にする必要がある。

本稿では、一応問題の空白は偶然の空白であり、何らかの要因で「～を鼻にする」という表現形式が生じなかった、という立場を取る。その要因とは一体何であろうか。推測の域を出ないが、「におい」という語の意味変化と関係があるように思える。徳川（1979:158）は、「ニオイも、カオリと似て動詞ニオウから生じた。この語もまた、元来鮮やかな色の現われる様子（つまり視覚に関する内容）を表していたと考えられる。」という興味深い指摘をしている。（『日本国語大辞典』参照）。歴史的には、「目で感ずる」ものが嗅覚に転用されたということであるなら、元来鼻で「におい」を感じていなかったことになるので、「\*鼻に・する」の元になる表現「鼻で・感ずる」は存在しなかったことになる（この不生起の予測を#で表す）。

(21) #鼻で・感ずる ==> \*鼻に・する

しかし、このような歴史的要因に基づいた説明を正当化するためには、例えば「目にする」というような複合表現はいつ頃から使われ始めたのかという点をまず明らかにし、その時期が「におい」が視覚的意味を保持していた時期と一致するかどうかを調査しなければならない。そのような調査は現時点では不可能であり、別の機会に譲らねばならない。ただ本稿では、問題の「～を鼻にする」構文は共時的には偶然の空白であるという主張を正当化するために現代日本語における用法を調査する必要はある。Yahoo Japan から収集した用例の幾つかを下記に挙げる。

(22)a. 薄暗い貯蔵庫に入ると、強烈な、それでいて心地よいポート・ワインの甘い香りが充満していた。この匂いを一度鼻にすると、絶対に忘れられない。

（武部好伸、「武部のこだわり旅行-- シェリーとポート・ワインを求めて」）

b. そんなわけで、なにかの折に、柑橘類の香りを鼻にすることがあると、故郷を思い出す。

c. ... に住んでいるが、たまに臭いのある空気を鼻にすることがある。

d. 駅からの家路を急ぐ時や、散歩道でふと鼻にする甘い香り。

(22a) は日本ペンクラブ会員の武部氏の旅行記の一節である。ワインの香りを鼻で嗅ぐ行為は自然な行為であるため、問題の表現は誰にも容認できるように思われる。(22b)-(22c) と (22d) は個人的な文章の一節である。(22d) の連体修飾表現もこの場合自然な表現といえる。「～を鼻にする」表現は、まだ辞書の中ではまだ市民権を得ていないが、日常の言語生活の中で使用されていることは明白である。この事実を考慮すると、問題の表現の文法性あるいは容認可能性は次のようになる。

(23) \*/??/?/ ok 鼻にする

因に、「鼻にする」の場合と同様に、「～で感ずる」表現が可能であるが「～にする」表現が不可能な表現を幾つか挙げておく。

(24) {舌/肌/皮膚} で感ずる ==> { \*舌 / \*肌 / \*皮膚 } にする

## 5. 結 語

以上の議論では以下のことを主張した。

- (25)a. 視覚以外の知覚的名詞は「～がある」構文と「～がする」構文の両方に生起して、単純な（事象）名詞と複雑事象名詞の両方の特性を持つこと。
- b. 「耳にする」というような「知覚場所名詞・にする」構文は「音がする」のような「知覚的名詞・がする」構文よりイディオム性が強いこと。
- c. 「鼻にする」という慣用表現が辞書では記載されていないが、日常言語生活では使用されていること。

本稿の議論から、「ある／いる」動詞は存在と所有を主に表現する形式であるのに対して、「する」動詞は視覚以外の知覚対象の生起を主に表現する形式であると主張できよう。従来、存在、所有、生起の三つの概念の区別についてあまり議論されなかったように思われるが、本稿では生起に関する表現における軽動詞「する」の重要な役割を確認したことになる。

## 註

\* 本稿の草稿の段階で、阿部幸一氏より貴重な助言を頂いた。ここに記して感謝したい。

1. 以下の議論では、「ある」と「いる」の対立が問題とならない場合は、「ある／いる」の表現形ではなく「ある」の表現形を使用する。

2. 何故視覚には複合表現が存在しないのか興味ある問題だと思われるが、なかなかその問いに答えるのは難しい。答えるためには、まず視覚の知覚的名詞が何かを考えねばならない。その前に、小泉（1989b）が提案する問題の複合名詞の派生過程に触れねばならない。以下の例がその過程である。

- (i) a. 匂う ==> 匂いで・感ずる ==> 匂いが・する  
 b. 聞こえる ==> 音で・感ずる ==> 音が・する

「匂い」が「匂いで・感ずる」と意味分解され、「感ずる」が「する」と形を変えるとともに、「匂いで」という道具格要素が動詞述語の枠から抜け出して命題部の項となり、主格の助詞「が」を帯びるようになった、というのが小泉の説明である。（この過程を小泉は「項化」と呼んでいる。）小泉の主張を妥当なものとして仮定した場合、問題の視覚の知覚的名詞のもとになる道具格要素は何かを考えねばならない。候補としては、例えば「姿」が考えられるが、これは「する」とは共起不可能である。

- (ii) 声は {\*あったが／した} が, 姿は {なかった／\*しなかった}.

つまり、視覚に対する「知覚的名詞＋する」表現が存在しないのは、問題の知覚的名詞それ自体が存在しないことに起因すると言えよう。従って、視覚を通した知覚の場合には、知覚対象を主格にした「～がある」構文という単純な表現が使われる。

3. この場合の「～がある」構文はいわゆる所有文と言えよう。しかし、(ia) の場合は (ib) の場合と違い所有の概念を表しているとは判断し難い。

- (i) a. この部屋にはビールだとはっきりわかるにおいがある。(There's a distinct smell of beer in this room.)

b. どの香水も特有のにおいがある。(Every perfume has its own distinctive smell.)  
 (ia) の There 構文は、所有概念を表現不可能であるので、(ia) は存在を表すと言える。

(ii) a. She has blue eyes.

b. \*There are blue eyes on her.

高橋・屋久(1984)は、もちぬしが無生物の場合でも所有を表すとして (iiia-c) を例示しているが、(iiid) のような問題の用例を存在文として扱っている。

(iii) a. この車は、エンジンが前にあります。

b. 恰も石に霊があつて、

c. 意志の力に不足があつた為ではありません。

d. 彼はまた町特有な何か臭いがあると思った。酢の臭いだ。

本稿では、「がある」構文における存在と所有の意味関係については、これ以上議論しない。

また、本稿では、(iv) のような所有文における「いる」と「ある」の交替については議論しない。

(iv) 政夫には子どもが {ある/いる}。

Kuno(1973) と柴谷(1978) は、(iv) における「いる」の場合は「に」格名詞が主語となる他動詞文すなわち所有文でなく「が」格名詞が主語となる自動詞文すなわち存在文であると見なし、所有動詞は「ある」しかないことを主張する。これに対して、岸本(2000, 2002) は「ある」と「いる」の両方が所有文に生起すると主張している。詳細は岸本(2000, 2002) 参照。

4. 更に、「におい」を「体臭」に換えて考えてみると、その違いが明確になる。

(i) a. 本当に体臭があるのかどうかを客観的にチェックすることが重要です。

b. 最近急に体臭が { \*ある/する } ようになりました。

(ib) では、(ia) と異なり体臭の生起を問題にしているため、「ある」は容認されない。

5. 『広辞苑(第五版)』では、(i) のように規定している。

(i) 為る：自サ変；す，動作・作用が現れる意／(1)「... がする」の形で、その事柄が起る(のが感ぜられる)意を表す。「頭痛がする」「花のにおいがする」...

## 参考文献

- 市川繁治郎(編)(1995)『新編 英和活用大辞典』東京：研究社。  
 影山太郎(1993)『文法と語形成』東京：ひつじ書房。  
 Kishimoto, Hideki (2000) "Locational Verbs, Agreement, and Object Shift in Japanese", *The Linguistic Review* 17, 53-109.  
 岸本秀樹(2002)「日本語の存在・所有文の文法関係について」伊藤たかね(編)『文法理論：レキシコンと統語』(シリーズ言語科学1) 東京：東京大学出版, 147-171。  
 小泉 保(1989a)「品詞分類としての動詞—「動詞」規定のむずかしさ」『月刊言語』9, 29-35。  
 小泉 保(1989b)「五感の動詞」『月刊言語』11, 76-82。  
 Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.:MIT Press.  
 新村 出(1998)『広辞苑(第五版)』東京：岩波書店。  
 日本大辞典刊行会(編)(1978)『日本国語大辞典』(縮刷版) 東京：小学館。  
 柴谷方良(1978)『日本語の分析』東京：大修館書店。  
 高橋太郎・屋久茂子(1984)「「～がある」の用法—(あわせて)「人がある」と「人がいる」の違い—」『国立国語研究報告 79 研究報告集 5』1-42。  
 徳川宗賢(編)(1979)『日本の方言地図』中公新書。

登田龍彦（1993）「日英語に於ける「存在」の表現に就いて」熊本大学教育学部紀要，第42号，人文科学，131-138.